

長歌

幸 讀岐國	安益郡之時	軍王	見山	作歌
讀岐の国の さぬきのくにの 帝が讀岐の国	安益の郡に幸す時に あやのこほりにいでますときに 安益郡に行幸された時に	軍王が こにきしのおほきみが 軍王が	山を見て やまをみて 山を見て	作る歌 つくるうた 詠んだ歌
霞立	長春日乃	晩家流	和豆肝之良受	村肝乃
霞立つ	長き春日の	暮れにける	わづきも知らず	むらきもの
かすみたつ (枕詞)	ながきはるひの 長い春の日が	くれにける 暮れたことも	わづきもしらず 分からず	心を痛み (枕詞) 胸が痛むので
奴要子鳥	ト歎居者	珠手次	懸乃宜久	遠神
ぬえこ鳥	うら泣き居れば	玉たすき	懸けのよろしく	遠つ神
ぬえことり (枕詞)	うらなきをれば 忍び泣いて	たまたすき 玉櫻ではないが	かけのよろしく 懸けて思うべく	我が大王の (枕詞) 我が大王の
行幸能	山越風乃	獨座	吾衣手尓	朝夕尓
行幸の	山越す風の	ひとり居る	我が衣手に	朝夕に
いでのしの	やまこすかぜの	ひとりをる	わがころもでに	あさよひに
行幸された地の	山を越えた風が	一人でいる	我が衣の袖に	朝も夕も
大夫登	念有我母	草枕	客専之有者	思遣
ますらをと	思へる我れも	草枕	旅にしあれば	思ひ遣る
ますらをと 俺は男だと	おもへるわれも 思っていても	くさまくら (枕詞)	たびにしあれば 旅の途中だから	おもひやる 思いを晴らす
網能浦之	海處女等之	焼塩乃	念曾所焼	鶴寸乎白土
網の浦の	海人娘子らが	焼く塩の	思ひぞ焼くる	我が下心
あみのうらの	あまをとめらが	やくしほの	おもひぞやくる	あがしたごころ
網の浦の	海女乙女たちが	焼く塩のように	焼け焦がれる	切ない心のうちよ
				万葉集卷一 5 軍王

<https://kochi-esc.sakura.ne.jp/wordpress/%e4%b8%87%e8%91%89%e3%81%ae%e5%9c%b0%e5%ad%a6>